

D-3 わが国の家庭教育の史的研究(第1報)へ脇坂義堂の家庭教育論へ
和泉短大 坂田澄

目的 子供は家庭に生まれ、そして家庭を生活の中心の場として成長する。それゆえに、家庭を場として営まれる家庭教育は、すべての教育の基礎になる最も大切な教育であるといえる。本研究では、このような重要性を帯びてゐる家庭教育について、そのあり方を考えるために、わが国における家庭教育の史的研究を行なつたのである。今回は江戸時代後期の心学者である脇坂義堂の家庭教育論を考察することにした。

方法 本研究では、とくに義堂の家庭教育論を分析するうえで重要と考えられる二つの点について、心学に関する文献を中心に考察をした。

① 義堂の代表的著作である撫育草にみられる家庭教育の内容について

② 江戸時代中期の心学者である手島瑞庵と義堂の児童観の関連について

結果 義堂の家庭教育論は江戸時代中期の心学者、手島瑞庵の児童観を基礎として構築されている。したがって家父長的家族制度を基本とする前近代的な家庭教育論であり、今日の民主主義社会の基準で批判されるべき内容を含みながらも、江戸時代後期においては別の面から歴史的意義を担ひてきたといえる。さらに義堂の家庭教育論は封建社会の枠の中で、家庭における成人男女両性員のハローリテイの安定化を土台として展開されている点は高く評価することができるといえる。